

## 戦争畢 其四

## 戦争をはる 其の四

## 虞韻

隊長横逆罪無辜

隊長 横逆にして 無辜を罪す

須識敗殘同作俘

すべからく識るべし 敗殘 ともに俘となりしを

投石倒顛圍蹴踏

石を投げ 倒顛すれば かこみて蹴踏す

衆擔拋水哭求扶

衆 になひて 水になげうてば ないて 扶たすけを求む

語注

横逆

我がままにて道理に従はざるをいふ

無辜

罪なきこと

倒顛

轉倒に同じ

終戦に伴ふ兵士の反亂を懸念せしや。「軍法會議は機能し、復員すれば裁判所に引繼がる」こと強調され、福州にゐし時よりも軍律厳しくなりて營倉入の増加を見ぬ。中國軍兵舎に入りしが如きは兎も角、まんとうを買食せし初年兵までやられぬ。爲に嚴罰に失すてふ意見具申を蹴られし先任軍曹をして、「戦争終り、彈丸の後から来る（味方に撃たる）こと無しと安心せしか」とぼやかせぬ。

中隊長は松山の生れなれば、敗戦後、松山出身者のみに編成替されし第一小隊に現れ、「汝らは旗本」とやりゐたり。酒癖も悪く、將校、下士官を殴りしこともありき。編成替後の酒宴にて酔ひ、關東、東北の兵を集めし第二小隊長、中部以西の第三小隊長らに因縁を附けぬ。少尉ら憤りしも將校のみ力みしとて何もなし得ず。

「今後の爲に」と先任軍曹が腹を括りて古き兵を呼集めぬ。數人が石を投げ、額に中りて倒れしを踏みつけ、蹴りつけせし擧句にクリークに放込みぬ。水深は一メートルもなきも、下半身が埋まるほどに泥の溜りぬ。泳著きしものの這上れず、岸に手を附けしまま動かざりき。死なば面倒なれば衛生兵に脈を看させぬ。

「名譽の向ふ傷」と勵しゐしが、中隊長も流石に應へしなるべし。

「否、恥なり」と繰返しをりぬ。

十數年後、京都河原町にて自衛隊の制服姿なりしに遭ひしが、額に残りゐし傷痕に撫でまほしき懐しさを覺えぬ。